

編集ノート

木下尚江および文学に関することなど

昭和三年五月十日付で石川三四郎にあてた木下尚江の手紙が石川家に遺っている。巻紙に達筆で書かれたこの手紙がどうやら、いままで頑なに拒んで来た旧著の復刊を諒承する、木下の最初の意志表示であったように思われる。

「我が腐屍ノ如キ文章ヲ官権ガ葬リ呉レン事ハ真ニ感謝ニ余ル逆縁ト申スベシ

刊行ヲ誘フ者ニ対シテ『不承諾』ヲ固執シタリシガ如キ、猶ホ我が裡ニ煩惱ノ残燼在リシヲ見ル、今度始メテ死灰トナリ了ハリヌ

願クハ我が齷齪ヲシテ永遠ニ故紙堆裡ニ安眠セシメ

ヨ
再ビ来リテ是ヲ動かス事勿レ
此事先方ヘ宜シク御伝達ヲ乞フ
五月十日

石川兄

木下尚江

荒畑君へ一筆啓上シ度候へとも彼ノ住所ヲ知ラズ一寸御知ラセヲ乞フ
この文面にある「先方」とはだれなのか、定かではないが、続いて五月二十三日にやはり石川あてに出さ

編集ノート

れた木下の手紙を読むと、十日付の手紙を受取ったのち、石川は望月百合子を木下の所へ行かせていることが分かる。たぶん編集の相談に向いたのであろう。文中にある「深尾ト云フ人物」は編集者であろうか。いづれにしても、なんのかの言いながら、著作集の刊行に木下がかなり乗気であったことが窺えよう。手紙は便箋にペンで書かれている。

「御病氣如何

昨日ハ百合子嬢ニ御苦勞相掛ケ申候

深尾ト云フ人物甚ダ氣ニ入り申候大安心致候

是レデ一切貴兄ニ投ケ掛ケ全然無関心ニ御座候然カ

シ貴兄トテモ他人ノ物ニ手ヲ掛ケルトナリテハ定メ

テ五里霧中ノ事ト想像セラレ候ニ依リ御参考迄ニ左

ニ愚案内申仕候

火ノ柱

第一巻……………

第二巻……………

第三巻……………
良人の自白

第四巻……………
霊力肉力

第五巻……………
乞食
墓場

荒野（一卷ノ評論）
日蓮論（小冊）

第六巻……………
野ノ偉人（田中正造）
基督抹殺論ヲ読ム（演説）

小生ノ著作トシテ単行本ニテ出テタル者ノ中

勞働（小説）

火宅（小説）

法然ト親鸞（評論）

右三者ハ駄目ニ御座候何卒貴兄ノ權威ヲ以テ永久ニ御埋葬ヲ乞フ

「日蓮論」ト申スハ何モ知ラナイ時一氣呵成ノ小作ナレド、恐ラクハ日本唯一ノ日蓮論ト存候是非一度御覽ヲ乞フ或ハ是ヲ第一巻ニ加フルガ可ナランカト存候

………
家内ガ塵埃ノ中カラ反故紙ヲ一包取り出シ候ニ付キ

開キ見タル所小生信州ニ窺伏中ノ文章ヤ弁護士時代ノ演説草稿ヤ獄窓ノ歌集ヤ其レカラ東京ニテノ演説草稿ナド様々ナ物現ハレ呆然ト致申候是モ一度貴兄ノ御覽ニ供シ度候、何カ埋メ草ニナルモノモ有之候ハンカ

五月廿三日

木下生

石川兄

明治四十五年筆を折って以来、再三の勧誘を拒けて来たかつての著作の復刊を承諾したのみか、その編纂を一任したということは、石川に対する木下のなみなみならぬ信頼のゆえであらう。この信頼のきずなは、石川が平民社以来の数少なくなった旧同志の一人だったゆえに結ばれたのだらうか。むしろ、それもあったらうが、それだけではない。

石川が木下に「初めて直接に会ったのは明治三十五年」であった。石川は萬朝報に入社し、黒岩周六の秘書をつとめるかたわら、理想団の事務も執っていた。理想団というのは萬朝報が主催した一種の社会運動で、東京市内は勿論、近県でも盛んに講演会を催し

た。この講演会の花形弁士が当時毎日新聞の記者であった木下尚江で、木下に講演の依頼をしたり、謝礼を届けたりするのが石川の仕事であった。

「あの頃、君の顔を見るのが楽しみだったよ」と後日の彼は私に述べた。

「僕の顔……とは些か語弊があるね。「金一封」の顔を見て……といふ方が科学的だよ」

と私は答へのであった。

（木下尚江を想ふ）『科学ペン』昭和十三年一月号所収

明治三十八年秋、平民社の解散が決まった席で、「クリスチャン・ソーシャリズムの雑誌をやれよ」と木下は石川にけしかけた。最初のうち、木下の意気込みは熱烈であった。しかし、年を越して明治三十九年になってから、次第に木下は精神に動揺を来たしはじめた。明治三十九年四月十四日付の石川あての木下の手紙はその一端を示している。

「拝復

雑誌「〔新紀〕」売行の悪しきはもとより雑誌の悪しき故也雑誌の悪しき是我等の力の足らざる也我等大に反省し大に発憤せざるべからず

何処までも奮闘せざるべからず然れ共焦慮すべからず焦慮は誠に益なし
我等の力の堪ゆるだけの雑誌を作る他に道なければ也

僕は今年に入りてより身心共に常に聊か異状あり非常なる懶惰の月日を送り来たり然れ共近日前途に新光明を見るの心地す大に奮戦激闘せんと欲す貴兄亦た幸に大奮発を為也

来月分にはツラマ〔此処も浮世か〕の処女作を試みんかと存居候

明日は前橋へ行く筈上州の山霊に浴して椽大の筆を揮はん

四月十四日

木下尚江

石川兄

徳富君の洋行誠に可なり羨むべし

この翌月、木下にはさらに大きな打撃が加えられた。母の死である。木下はのちにその時の衝撃をこう記している。

「翌年〔明治三十九年〕五月、予の母は恰も暁の灯火の消ゆる

が如くに呼吸を閉じた。母が最早物言はぬ人となられた時、予は狼狽の度を越して、我ながら恰も喪心者の如くなつたことに驚ひた。母を葬つた後、継続しつとの事業に手を着けようとして、予は忽ち一個の疑問に行き当つた。

「何を為すか乎。何故に為すの乎」

（「基督抹殺論」を読む）

こうしてついに木下は自らけしたてて始めた『新紀元』を自らの手で葬ってしまった。『新紀元』終刊号で、木下は「慚謝の辞」を掲げたが、それは石川にいわせれば、「まことに傍若無人の態度で、『慚謝』の心情など些かも窺われない放言」〔本著作集第八巻〕であった。「一年間、熱心に、『新紀元』に応援または協力してきた青年同志達は或いは失望し、或いは憤激し或いは呆れたが、どうすることもできませんでした。木下はいつもこうした性格を持ちつづけていたようです。偉大な天才でしたが、こうした性格から、よき同志を発見し得なかつたので、その才能を充分に發揮し得なかつたのだと思います」と、石川は続けている。

その後、木下は一時伊香保山中に籠ったりするが、

石川との縁が切れたわけではない。明治四十三年、大逆事件が起こり、幸徳らの死刑を予想して、石川が死刑反対運動を進めようとしたことは『自叙伝』にも述べてある。『自叙伝』では、徳富蘆花や弁護士の花井卓蔵に働きかけ、いずれも積極的な賛成を得られず、石川自身もファイトを失い、結局この運動は不発に終わったことになっているが、同じように木下もまた石川から働きかけを受けている。その折の断り状が遺っているが、いかにも木下の面目躍如たる文面なので、長文だが引用しておく。明治四十三年十一月十五日付である。

「昨日は失礼只今御端書拝見

偕て死刑廃止運動云々了承、然れども小生は参加するを欲せざる也君の発意秋水君等の事より来たりしもの君が友人を思ふの情真に感激に余あり秋水捕はれたりと聞きし時より彼らの死刑のことは覚悟仕り爾来今日至る迄日として此事を思はざるは無し何故か小生生涯秋水を慕はしく思ふ彼が東へ行くに連れて小生は益々西へ行く思想の距離益々開きを加ふると共に彼を思ふの情ます／＼切なり死刑の前に立

つ彼のを考えて日々我心身に鉄鞭を加へつゝあり然れ共彼が為に死刑を免れしむることの可否に至れば痴愛を棄て、静慮するを要す

小生は中学時代に続々皇朝史略と云ふものを読み大石良雄の死刑問題一件にイタク感動したり当時將軍綱吉は良雄等四十七士の死刑を赦すの意あり然れ共国法狂ぐべからず茲に於てか輪王寺官法親王の御声掛りを求むる為に一日上野に詣りて法親王に謁し其れとなく良雄等の復讐始末を物語りぬ然るに法親王の態度非常に冷淡にして取りつく島もなし綱吉已むを得ずして帰る綱吉去るの後、法親王其の侍臣に謂て曰く將軍の意は予をして良雄等の為に命乞ひせしめんと欲するに在り然れ共彼等にして死せずんば其名遂に後世に伝はらず予が命乞ひせざる所以なりと、始めて之を読みたる少年時代の小生は只だわケもなく歎服したり其後に至りて法親王の態度俗臭ありと云ふ疑を抱きしが今に至りて思へば矢張一段の高見ありしことに服せざるを得ず

今日の小生は勿論幸徳の議論に服せずと雖も而かも其の意の在る所を了解するや更に深きを加へ得たり

と信ず幸徳の目的は死刑に依て成就するものに非ずや若し幸徳にして死刑を逸れんか彼は全敗者也最早身を置くに処なし私情として誰か悲まざらん去れど彼の為に国権の有望を希望するが如きは是れ幸徳を侮辱するの最も大なるものなりと信ず

且つ幸徳云々を離れて一般問題としても小生は死刑廃止運動に熱心なること能はず小生は狭き路を一直線に進まんとして在り即ち『人は皆な死刑の前に立ちつゝあり』と云ふ一事を自覚せしむる一点に全心を集中しつゝあり願はくは法律問題立法問題議會問題へ退動せしむべく誘惑する勿れ

十一月十五日

木下尚江

旭山兄

福田さんへ御無沙汰の御詫よろしく

「

情理を兼ね備えた文章とはこういう文章をいうのであろう。この文面を前にして、石川も得心せざるをえなかったのではあるまいか。さらにそれは石川の死生観に深く影響を及ぼしたかみえる。そのことは本巻に収めた死、とりわけ自殺をめぐる石川の論稿（自殺は創造なり）「有島武郎君の死」「死」などに明らかである。

石川と木下の間柄は、石川が獄中で「発見」したエドワード・カーペンターを仲立ちにしてもう一度深まる。すなわち、石川は木下の誘いに甘えて、『野人語』第三に「哲人カーペンター」〔本巻〕を寄稿し、木下は石川の『哲人カーペンター』に跋文を寄せている。しかし、その頃から木下は西田天香や岡田虎二郎の下に赴き、石川とは疎遠になっていった。石川にとって、西田や岡田は感心できない人物であった。「殊に木下が岡田を先生と呼ぶのを見ては憤懣に堪えなかつた。私はこれ等の人々を山師だとも罵つたが、木下はそれを甚だ喜ばなかつた。私から見れば、天香よりも虎二郎よりも尚江は遙かに尊く、愛すべき人物であつた」〔木下尚江を想ふ〕同上と、書いている。

大正二年、石川が日本を脱走した時も、大正十年、帰国した時も、木下はあまり喜ばなかつた。「けれども私が一切の政治運動を排撃してアナルシイを主張するのを見て、再び昔の私を見出した如く、頻りに私との会談を喜び求めるやうになつた。」（同上）

次の三通の木下の葉書は石川の思い出を裏づけるものであろう。

「土の権威」〔本著作集第五卷所収〕ヲ読テ君ノ態度、髣髴解得、甚タ不堪愉快、君ハ科学ニ立チ僕ハ空想、此ノ如クンバ友人トシテ終ニ衝突ノ恐ナシ安心々々、小生其後共学パンフレットノ購読者トナルベシ」

（昭和二年九月二日夕）

「オレハ君ノ『非進化論ト人生』ヲ耽読中ダガ君ガ音楽舞踊美術一切ニ涉ツテ觀賞眼批評眼ノアルニ驚歎スル、オレハ全クノ盲目ダ從テ毫モ興味ガ無い成程『冥目黙生』是レガオレノ運命ダ今モ君ノ文章ヲ誦シツ、ツク／＼ト感シタ 九月三十日夕」

（昭和二年九月三十日夕）

「パンフレット第三」〔『無政府主義とソ』デモカリスム』〕拜読、オカゲデ種々智識ヲ得タ、斯ウ云フ風ニ書イテ貰ヘルト我等無学者ニモ能クワカル多謝

此程吉祥寺ノ野ニテ写生

尾花ガ原ソヨ風渡リ、青空ノ不ニノ雪山

朝日カマヤク 十一月二十二日

（昭和二年十一月二十二日）

木下ガ石川にその著作集の編纂を一任してもよい気

名で、石川五右衛門の辞世にあやかったものであることはすでに書いておいた通りである。

明治時代、石川は旭山とそのバリエーションである旭山人のほかに、もう三つほど筆名を用いている。あるいはまだあるのかもしれないが、いままでに確認されたのは三つである。一つは犬王あるいは石犬王で、最初週刊『平民新聞』第四十二号（明治三十七年八月二十八日）に載った「米価騰貴の真相」に現われ、その後は『直言』の雑報記事に散見される。また、『世界婦人』第三十四号（明治四十二年三月五日）に長犬王の筆名で「犬王録」という文章が載っているが、これが石川のものか否かは、最初の「米価騰貴の真相」とともに、いまのところ確定し難い。

犬王の由来については、石川自身、『直言』第二巻第十九号（明治三十八年六月十一日）所載の「平民社より」〔本巻所収〕に書いている。

「▲読者諸君は『直言』紙上で時々『犬王』といふ署名を御覧でしやう。『石犬王』だの、『荒犬王』だの、随分奇妙な名があると感じられたでしやう。抑も犬王とはドウいふ意味合ひの文字かといふに、之

持になった背景は、この辺りからさぐっていくことができるだろう。

最後に一通、木下が没する半年前に書かれた葉書を添えておこう。「昭和十二年六月十三日朝」と日付のあるこの葉書には、二輪のバラの花が墨で描かれ、左側に「庭前紅白ノ薔薇覧上」とあり、木下の朱印が押され、右側に「クロボトキンノ倫理学ヲ読ンテ居ルカ実ニ大シタモノダ」とある。

*

石川が明治時代に旭山と号し、大正以降、不盡の号をもつばら愛用していたことは、本著作集第二巻の「編集ノート」に書いた。旭山は石川の故郷旭村字山王堂に由来している。近藤真柄が「石川さんの想い出」〔本著作集第八巻月報〕で指摘しているように、秋水（幸徳）、枯川（罌）、孤剣（山口）、寒村（荒畑）など、どちらかといえば暗くきびしい感じの号が多いなかで、旭山は「一番明るく派手で大きい」。それは石川の人柄がそうだったというのではなく、むしろ石川の願望の表明として理解されよう。不盡が斯波貞吉の命

は其初め山路愛山氏から伝はつた発明なそうだが、『ケモノ偏』（即ち犬）と『王』のツクリで出来た『狂』といふ字から出たのです。即ちヘンの犬とツクリの王とを離して『犬王』といふのです。

▲ソレなら『犬王』とは誰の別名かと言ふに、其初めは実は僕のであつた。僕、昨年中、少しく苦悶の合間に閉されて居つたが、其が為めか僕も少々狂的の所があつたと見え、秋水兄などには『君は余程犬王だネー』などと冷かされるのが屢々であつた。ソウなつて見ると、僕は私かに此の『犬王』という名が懐かしうなつて来て、到頭自ら此名を冠するに至りました。

▲所が此の犬王に色々な種類が出来て、平民社の中でも松岡（文子）さんは天才的犬王で、僕は凡人的犬王だそうです。又た荒畑君などは自ら『荒犬王』と称し、山口君に『山犬王』の名を呈するなど言ふて居る。それでは僕も此等の諸犬王に対して差別を付けねばならぬので、『石犬王』と称するに至つたのです。（以上旭山記）〔本巻三〇四ページ〕

石川の苦悶については『自叙伝』の「八 悩みはつ

づく」でも綿々として語られている。しかし石川の場合とはにかく、「大王」が平民社内で流行したのは、ちょうど幕末に山県有朋が自ら狂介と名乗ったように、時流に抗する改革者の心意気が「狂」と感じられたからであろう。

いま一つは山紫楼あるいは山紫楼主人で、最初に使われたのは「仏耶両教会の墮落」(『直言』第二巻第二十号、明治三十八年七月十六日)【本著作集 第一巻所収】という文章である。これは三、四郎の読み替えたが、ここでも山が使われている。秩父や上毛の連山を遙かに望む利根川べりの故郷の地からの発想もからんでいたのであろうか。この号のちに『世界婦人』で二度、それから初出誌は不詳だが、「蛆虫の如き耶蘇教徒」【本著作集 第一巻所収】という「明治四十五年三月一日」の日付のある小文に用いられている。偶然かもしれないが、キリスト教批判の場合に山紫楼の筆名が使われている。

もう一つの帆雨もしくは帆雨楼主人の方は、文学関係の場合に使われている。この筆名が石川のものであることについて、たとえば石川自身の証言のような決定的な確証はないのだが、二つの点からまず間違いな

「独逸軍人の結婚」というさきの文章と同じ演題で石川が行った話の要旨である。

これからして帆雨楼主人が石川三四郎ではないかと、まず推定されるが、「独逸軍人の結婚」の「緒言」と「独逸軍隊小兵営」の前文とを読み較べると、さらにこの二人が同一人物であることははっきりしてくる。一字一句同じというのではないが、両者の文脈はまず同一とみられるからである。これが第一点。

第二点は、本巻に収めた二つの小説「脱殻」「恋か魔か」の内容に関わる。この小説の筆者はいずれも帆雨となつてゐるが、まず帆雨楼主人と同一人とみてよいだろう。というのはこの小説の載つた『世界婦人』第三十五・三十六号(明治四十二年四月五日・五月五日)に、帆雨楼主人の名で、「西洋文学と婦人の効績」【本著作集 第一巻所収】が連載されている。同じ号に、帆雨と帆雨楼主人と名乗って二人の筆者が登場することはまずありえない。のみならず、そこで語られる卒業式の日恋人が写真を贈ったという話などは、『自叙伝』で語られたところを思い出させる。それについては本著作集第八巻の「編集ノート」に書き留めておいたから参照

いとおもわれる。

この筆名が初めてみえるのは、『新紀元』第六号(明治三十九年四月)より第九号(明治三十九年七月)まで四回にわたつて連載されたビルゼー中尉の小説「逸軍艦小兵営」である。それは帆雨楼主人抄訳となつてゐる。この小説は明治三十七年に刊行され、欧米諸国で大変に評判となり、著者はいわば内部告発者ということで軍職を剥奪され、のちイギリスに渡り、煩悶の末自殺をしたと伝えられる。「予は深くビルゼー中尉に同情する、而して僥倖にも『殺人的賭博』に一勝を占めて驕り顔なる日本軍人をして、此の尊敬すべき中尉の恩恵に浴せしめたいと思ふ」と、前文で訳者は書いてゐる。それは反軍小説であると同時に、「金錢結婚」を糾弾する反体制小説でもある。

ところで、この小説の紹介を軸にして、「金錢結婚」のよつて来るゆえんを指摘し、自由恋愛を主張する「独逸軍人の結婚」【本著作集 第一巻所収】という文章が『直言』第二巻第十二号(明治三十八年四月二十三日)に掲載されている。筆者は石川旭山。そしてこれは明治三十八年四月九日、平民社で開かれた社会主義婦人講演で

していただきたい。

以上のような考証によつて、帆雨、帆雨楼主人を石川のもう一つの筆名と断定したのであるが、どうであろうか。ここでさらに推測を逞しくするのなら、帆雨もまた石川の故郷の風物に関わらせることができる。石川が育つた利根川を行き来してゐた帆船がそれである。『自叙伝』で石川は、「私の故郷には何時も大小二十隻以上の帆船が行き来してゐたものです」と書いてゐる。

*

石川はほとんど口癖のように、自分は文芸の門外漢だという意味のことを書いたり、口にしたりしている。文壇とか詩壇とかいう枠のなかでいうならばたしかにその通りであるが、しかしこの門外漢、なかなか文芸に造詣も深く、また浅からぬ関心を寄せていたことは、本巻に収めた論稿や作品からも窺えよう。だが、ページ数や編集方針の都合で割愛したいいくつかの評論や翻訳にはぜひ触れておく必要があるようにおもわれる。

その一つは、『人物』という月刊誌に発表した「ホイットマンの少時」と題する評伝である。亀井俊介『近代文学に於けるホイットマンの運命』（昭和四十五年）をみると、石井満・品川力「日本におけるホイットマン文獻」（『比較文学』七巻、昭和三十九年十一月）からの引用として、この評伝は大正元年九月号と十二月号に発表されたことになっているが、これは編者も断わられているとおり、『近代思想』掲載の広告からの推定であり、石川家に保存されている切抜きでは、上、中、下、第四、五、七号（大正元年九月十五日、十月十五日、十二月十五日）の発表である。署名は旭山人である。

この『人物』という雑誌は、どういう性格の雑誌か分らないが、『近代思想』に載った広告をみると、たとえば第四号では西川光次郎、茅原華山、伊藤痴遊、堺利彦、白柳秀湖、大杉栄、高島素之、山口孤剣、第六号では西川光次郎、福本日南、堺利彦、伊藤痴遊、第七号では宮崎湖処子、新渡戸稲造、西川光次郎、大杉栄といった筆者が並んでいる。取り上げている人物も親鸞上人、木曾義仲、西郷隆盛から田岡嶺雲、長谷川如是閑、山室軍平、外国人では石川のホイットマンの

ほか、イエスとマホメット、ルーズベルト、さらにはラッサルを決闘に追い込んだヘレネ・フォン・デンニグスなどまことに種々雑多である。ちなみにこのヘレネを書いたのは大杉で、大杉はまた山崎今朝弥も書いているという。

亀井が述べているように、石川のホイットマンへの関心は、カーペンターを経由してのものであるが、『ホイットマンの少時』の書きだしはやはり石川らしい。

「ホイットマンの為人」

今、世に公にせられて居るホイットマンの全集に接し、華美を尽した十巻の書籍を手にした者は、何人も、之が果して著者其人の素志であるかと疑ふであろう。又、彼の伝記類の如きも、殆ど皆現実の人物の節を留めて居らぬ様に思はれる。其描かれた人物は全然で金箔をつけた張子の人形の様で、血ある生ける人間とは思はれない。蓋し其筆者編輯者等が此詩人の節を保全しやうと余りに凝り過ぎた為に、却て其人間の生氣を抹殺してつたのだ。

幸に、人間としての——畸形物として——無く——

彼の記念が保存されてある。ホイットマンを知つてた人々が尚ほ生存して居る。彼等はホイットマンを簡易生活の一紳士として情愛濃やかな友人として、善良なる隣人として、又、心底からの愛人等として記憶して居る。」

こうして石川は、カーペンターの「ホイットマン訪問記」その他の友人、知人の証言や手紙などを引きながら、『草の葉』を出版するまでの青年ホイットマンの人となりや暖い筆致で綴っていく。おそらくなにか下敷きがあったのだろうが、いまのところ不明である。石川があらひのままのホイットマンの姿を描こうと志したことは、ホイットマンの子供についての記述からも読み取れるだろう。

「アルトは生涯結婚をしなかつた。女を娶らなかつた。が、小供は持つたのである。自分の実の小供を儲けたのである。ホイットマンの伝記者は種々骨を折つて此事を論じて、然も遂に其事実を否定することとは出来なかつた。処がホイットマン自身は此事実を少しも隠さずに友人に談つて居る、而も其小供は六人もあつた。其小供の母親は一人では無かつたか

も知れない。一八九〇年八月十九日に其友人アツドン・サイモンズに送つた書面に彼は自ら次の如く書いて居る。

『青年、中年時代、南方住居時代の予の生活は肉体的の快楽を楽しんだものである。従て人の批評は免れまい。私は結婚は為なかつたが、小供は六人も持つた。して二人は死んだ。今生きて居る一人の孫は仲々好い兄で、時々手紙を寄す。周囲の事情は予をして其親密な縁者より分れしめた。』然し是れは唯だ若い時の事で中年を越してからは、全然其様なことは無くなつたのである。」

「娶ら」ずして「小供は持つ」青春を過した石川自身、複雑な感慨でこの行を記したのではないだろうか。

共学パンフレット第二輯として発行された『土民芸術論』には、「土民芸術論」（『土民芸術』第一号昭和二年四月一日）（『本著作集』第三巻所収）【初出誌】（『本著作集』第三巻所収）ほか二篇が収められているが、この「土民の文芸観」で、石川は「文芸の文芸としての価値は、『無限』の飛躍の程度によつて定まる」とし、その実

例として、ヴィクトル・マルゲリトの『ガルソンス』、エミール・ゾラの『Messidor』、オクタヴ・ミルボオの『悪指導者』などに触れている。これらの作品はいずれも石川が紹介したり、翻訳したりしたものである。石川はこれらの作品を「社会文芸」「無政府的社会文芸」と呼ぶが、「然も是等の作物は決して其社会的なるが故に、其無政府主義的なるが故に、価値があるのではない。それが、どんな人の魂の中にも張られてゐる無限の無絃の糸の調子の高いギブラシオンを送るからである。そして其ギブラシオンが起されるのは、其芸術が『無限』から起つた飛躍だからである」と正しく評価している。

石川が「恋愛と自由 マルゲリトの『ガルソンス』を読む」を書いたのは、『ガルソンス』が刊行された翌年、大正十二年七月三十日となっている。切抜きが残っているが、初出誌がなにかは分らない。約四十枚の長篇で、その後、後藤亮一編『近代恋愛大観』（大正十五年十月、三水社）に「マルゲリトの『ガルソンス』と恋愛」と改題して収める折に、書き込みや訂正が加えられている。第一次大戦後の混乱と腐敗を鋭く

摘発したこの小説は、その大胆な女性自立の思想や赤裸々な性描写のゆえにフランスで一大センセーションを巻き起し、「ガルソンス」は「おとこ女」、つまり男と同じように性的にも振舞う女ということと流行語になったという。おそらく石川はその評判を聞いてこの書物を読み、大いに感激して紹介の筆を取ったのである。文末に「石川生曰、私は今此書の全訳に着手して居る。余暇を持たない私は何時之を成就するか知れないが、成るべく早く世に出したいと思つて居る」と記されており、全訳の意向をもち、一部すでに着手されていたようである。石川が『ガルソンス』にどれほど打ち込んでいたかは、次の一節からも窺われよう。「私が此稿を起したのは、即ち此書の梗概を紹介したい為である。此書が世の非難を受ける点は、モニク嬢及び彼女を包囲する社会の男女関係、殊に甚だしきは女子同志の淫行、等を極めて露骨に叙し去つた処にある。諸処に挿入されたる性交が春画的に記録せられた点にある。けれども此春画は不思議にも決して人の性欲を挑発しない。否寧ろ人をして其獣的肉行の没趣味を嫌悪せしめねば己まない。是れが世

間一般に行はれる所謂恋愛小説と甚だ其趣を異にする点である。そして此点がマルゲリト氏の手腕の非凡なことを物語るもので、亦本書の期待する目的を立派に成し遂げたものと言へやう。」

『ガルソンス』に対するこの深い感興は、かつて『新紀元』に抄訳したビルゼー中尉の『墮落軍隊小兵營』にまでつらなるものとみてよいだろう。もっともこの本の石川訳は日の目を見ずに終わった。翻訳が完成しなかったのか、その革命的な内容に出版社が尻込みしたのか、そのあたりの事情は分らない。大木篤夫訳『恋愛無政府』としてこの本の訳書がアルスより出たのは昭和五年のことである。戦後もまた昭和二十五年に創元社から永井順訳『ガルソンス』が出、話題を呼んだ。

『ガルソンス』の翻訳は活字にならずに終わったが、大正十三年七月から昭和二年四月にかけて、石川は第二次『明星』に次々とフランスの戯曲を訳出している。石川が『明星』に書くのは、大正十二年四月号に載った「進化とは」〔本著作集〕が最初で、その後「有島武郎君の死」「ダダイスト清子」〔いずれも本巻所収〕を書いている。

これらの戯曲を訳すに至った石川の意図については、「環境が無い」〔本著作集〕という短文で、「魂の渴を癒してくれる様な文芸」の出現を日本の文壇に要望する以前に、「自分で此魂の要求に対応せねばならぬと感じた」からだ、と述べられている。「ミルボオ、ドオデ（アルフォンス）、ゾラ等、何れも深い感銘を以て私の魂は自らそれに浸ることが出来た。いづれも大宇宙の子たる人間の美的感激の表現として、私の思想と心魂との饑と渴とを癒してくれた」というのである。

以下に石川が訳出したフランスの戯曲の一覧を掲げ、若干コメントを付けておこう。

「悪指導者」(オクタヴ・ミルボオ) 第5巻第2号、第6号、第6巻第1号(大正13年7月1日)11月1日、大正14年1月1日)

「アルルの女」(ドーデー) 第6巻第2号、第5号(大正14年2月1日)5月1日)

「子供神聖」(ゾラ) 第7巻第1号、第3号(大正14年7月1日)9月1日)

「Messidor」(ゾラ) 第7巻第4号、第5号、第8巻第1号、第2号(大正14年11月1日)12月1日、大正

15年1月1日～3月1日)

「河舟物語」(ドーデー) 第9巻第4号、第10巻第1号、第2号(大正15年10月1日、昭和2年1月1日、4月1日)

「悪指導者」は昭和二年十月、築地小劇場で上演されている。上演したのはアナキスト系の劇団「解放座」で、演技者は金井新作、古田徳次郎、萩原恭次郎、飯田徳太郎ら『文芸解放』の同人たち、演出は飯田豊二であった。いずれも演劇にはずぶの素人、その上当時の左翼演劇の常として、台本は検閲のために虫喰いだらけになるという有様であったが、「素人だが手がけて稽古を積んでいるうちに、役者連中の素人がいつしか素人ばかりではなくなったといわれたほど、それほどひたむきな努力を惜しまなかった。……この芝居はフランスのある工場のストライキをめぐる事件がテーマだったが、ストが最高潮に達する第三幕では殆どの労働者の科白が削られてしまうこととなったが、飯田はそこを、光と闇の交錯する中に、逆にパンタイムで完全に押し通すことによって大きな効果を

挙げた。どのようなはげしい言葉を以てしても及ばぬ迫力を演出したのである」(秋山清『アナキズム文学史』筑摩書房)といわれている。

なお、『悪指導者』は同じ十月に金星堂からパンフレットで公刊されている。また「アルルの女」は昭和四年二月、『世界戯曲全集』第三十三巻「仏蘭西編(三)」に収められた。しかしこれらの戯曲のうち、石川がいちばん愛着を抱いたのは、ゾラの『Mes. 5. 10. 11.』であったようだ。というのは、『時の自画像』(昭和16年9月、育生社弘道閣)に「収獲」と改題して全文収録しているばかりでなく、戦後、昭和二十四年一月発行の『リベルテ』第三号にも、おなじ「収獲」という題名で、しかし大幅に書き改めて発表しているからだ。これは石川も断っているように、換骨奪胎の翻案である。なぜ石川は二十年余りものちになって、このような翻案を試みる気持になったのだろうか。石川の魂は、敗戦後の殺伐とした風景の前に烈しく渴えていたのかもしれない。

(大沢正道)

石川三四郎著作集第六巻

定価三四〇〇円

昭和五十三年三月三十日印刷

昭和五十三年四月十日発行

著者 石川三四郎

発行者 清水康雄

行発所 青土社

東京都千代田区神田神保町一・二九 市瀬ビル

電話〇三(二九)九八三一

振替東京九一・一九二九五五

印刷・三晃印刷 製本・美成社

0330—900204—3978